

令和4年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる
「共同研究班」 研究報告書

令和5年4月25日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域の文化・言語		
担当者	氏名	所属機関・職	
	安達 大輔	スラブ・ユーラシア研究センター・准教授	
班員	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	大武 由紀子	北大文学研究院・共同 研究員	ロシア・アヴァンギャルド絵画
	研究テーマ		
	ソヴィエト美術史：1920年代～1930年代のアヴァンギャルド絵画と社会主義リアリズムとの関係		

研究成果の概要

1. 研究の目的

昨年度のテーマ「スラブ・ユーラシア地域の文化・言語」のキーワード「生存戦略」を軸に、1920年代から1930年代のソヴィエトのマジョリティとしてのソヴィエト大衆に対して、権力による価値観と社会規範からある程度自由な位置を維持するものとして知識人、特にアヴァンギャルドと称された一群の芸術知識人をマイノリティと対置し、その生存戦略を①転向 ②面従腹背 ③公的形式逆利用した自らの創造の追求の3つに分類した。その上で③に属する画家であり、イーゼル絵画をブルジョア芸術として否定した『芸術左翼戦線（レフ）』対抗して、新たな絵画を希求したソロモン・ニクリーチンの絵画分析を研究目的とした。

2. 研究の内容

- ・ニクリーチンによって創出されたプロレタリア芸術様式「オラトリオ」の背景をなす芸術理論論文「我が国の＜マルクス主義者＞の芸術理論家及び批評家のある誤謬について」（1928年・国立ロシア文学・芸術文書館蔵）を解読した。それにより当時のニクリーチンの芸術理論とそれに対応するシリーズ作品「オラトリオ・スターリン」の関連性の分析を試みた（7月28日、スラブ総合演習で発表）。

- ・ニクリーチンの作品（約1200枚）及びアルヒーフ（多くは未調査）を所蔵する国立ギリシア現代美術館（テサロニキ）に調査出張した（10月2日～10月23日）。同時にギリシア正教の総本山アトス山を訪問し、ロシア・アヴァンギャルドに多大な影響を与えたイコン画を調査した。

- ・これらの出張の内容を北海道スラブ研究会で発表した（12月21日）

- ・ニクリーチンの芸術理論と実作「オラトリオ・スターリン」の関連性をテーマにして論文にま

とめロシア文学会誌に投稿した（2023年1月末）。

3. 研究の成果

- ・論文「我が国の＜マルクス主義者＞の芸術理論家及び批評家のある誤謬について」において、ニクリーチンは、好敵手「レフ」の社会・芸術的「方向性」を、国家（党）のそれに反するものとして批判し、自らの路線こそが党の路線に沿うものであると明言している。そのことは、ボリス・グロイス著「全体芸術様式スターリン」においてかつて焦眉の問題となった「アヴァンギャルドとスターリン主義の連続性」という見地において、アヴァンギャルドの中でも様々なスタンスがあること、それゆえ詳細に分け入って研究する必要があることを意味している。つまり「レフ」を代表とするアヴァンギャルドと「反レフ」とも言いうる路線の共存である。アヴァンギャルドをおよそ「レフ」に収束させて理解することを一旦留保し、その運動をより広い芸術運動としてアプローチする必要性が明らかになった。
- ・そのことはモククワに在住したギリシア人コレクターのゲオルグ・コスタキスが収集したアヴァンギャルド作品が多くを占める国立ギリシア美術館の調査からも明らかであった。アヴァンギャルド運動はこれまでの理解を超える幅の広い運動であったことを踏まえた研究が今後の課題であると実感した。
- ・ニクリーチン作品の調査研究を課題にするテサロニキ美術館は未だ研究者の少ないニクリーチン研究に従事する国外研究者とのコラボ及び国外特にアジア諸国での所蔵絵画展覧会の開催を強く希望している。そのような国外の研究動向に直に接してアヴァンギャルド研究への新たな視界を開くことができたことが共同研究員としての一番の成果であった。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

なし

当該研究活動をもとに採れた研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

国立ギリシア現代美術館（テサロニキ）主催の共同研究プロジェクト（画家ニクリーチン・コレクション）への参加を申請中